

“小さな願い”を叶える意思決定支援

当院では、人生の最終段階における医療・ケアの提供において、多職種から構成される医療・ケアチームで患者等に対し適切な説明と話し合いを行い、患者本人の意思決定を尊重した医療・ケアを提供しています。今回は地域包括ケア病棟(5階病棟)のエピソードを紹介させていただきます。

Episode：さくらが咲いたら ～未来をつなぐ在宅療養支援～

「さくらが咲いたら、花見もしたいな」

60代のAさんがふと口にしたこの言葉は、これから先の時間を思い描く、ささやかな願いでした。

「お正月は自宅で過ごしたい。生まれた孫にも会いたい」。その一つひとは特別なことはありませんが、Aさんにとっては日々を生きるための大切な目標でした。AさんはS状結腸穿孔により人工肛門を造設後、全身に多発する痛風結節と関節破壊による慢性的な疼痛を抱えながら、在宅療養を続けていました。しかし、ストーマからの下痢便が持続し、皮膚トラブルや体重増加に伴う装具適合の困難さが重なり、自宅での生活は徐々に難しくなり、入院となりました。在宅では妻が中心となって介護を担っていましたが、夜間を含む頻回の処置により負担は大きく、心身ともに疲弊していました。施設入所も検討される状況でしたが、Aさんの「自宅で過ごしたい」という思いは変わることはありませんでした。そしてその根底には、「さくらが咲く頃も、家で過ごしていきたい」という願いがありました。その思いを受け、担当看護師を中心に、皮膚・排泄ケア認定看護師、医師、介護福祉士、退院支援看護師、リハビリスタッフが連携し、在宅復帰に向けた支援が始まりました。ストーマ管理の見直しや皮膚トラブルへの対応、疼痛コントロールを行いながら、Aさん自身もリハビリに前向きに取り組むようになりました。ご家族への支援も重ね、在宅生活を支えられる体制が整えられました。退院にあたっては、地域の訪問看護ステーションClampと連携し、継続的な在宅支援体制を構築しました。その結果、Aさんはお正月前に自宅へ戻ることができました。自宅で迎える日常の中で、Aさんはこれまでと変わらない時間を取り戻しつつあります。



まだ蕾の桜を眺めながら、訪れる春を待つひととき



「さくらが咲いたら」という言葉は、単なる季節の話ではなく、これから先も続く生活への希望そのものでした。現在もNさんは在宅での生活を続けながら、ときに入院を挟みつつ、その人らしい日々を過ごされています。本症例は、患者さんの「これから」を支える医療のあり方を示しています。多職種と地域が連携し、一人ひとりの願いに寄り添うことで、その人らしい生活を支えることができる——。私たちはこれからも、患者さんが思い描く未来をともに支えていきます。